エコロジー空間論 News

3

２０１１年４月２８日（木）１４：４０～１６：１０
京都精華大学春秋館１０１号室

第３回　神松幸弘（総合地球環境学研究所）
「京の自然　ー造られたものと生まれたものー」

神松さん

○自然を感じる風景とは？

学生：[嵐山の竹林の中、鳥の鳴き声、風による木のざわめき、木漏れ日]
[亜熱帯林、高山]：あまり人の手の加わらない自然がある。
[渓流]：涼しい。気持ちがいい。一方で、マングローブ林の水が淀んだ景色もまた自然。
[牧草地]：「北海道の大自然」などと謳われる。しかし、元々あった原始林を伐採し、人間が徹底的に開発した跡。

牧草地（北海道）

牧草地の風景を見て「自然がいっぱいで良い」と感じる
建物が建っていない、緑が広がる、などのイメージ。
人の手が加わっていても、我々はそれを自然だと認識する。
[里山]：人が長期的に介入した結果として生まれる、二次的な自然。
[庭園]：池泉回遊庭園（西芳寺（苔寺））
自然といえる？
人工でなく、自然にこういう風景があったら、それは問題を抱えている自然。
・林床に生えているべき下草が無い。→下草が動物の食害に遭っている。
・水が淀んでいる。→富栄養化（植物プランクトンの大量発生）、汚濁物の豊富な水の流入
美しい自然のパーツを散りばめてつくり込まれた景観。

池泉回遊庭園（西芳寺）

○京に持ち込まれた自然

歴史や文化の溢れる古都の見物に調和する。
自然にあるよりも、美しさを際立たせる。四季を告げるのも、人間活動の暦に合わせた自然の演出。

- 個々の生き物は連れてこられて、装飾品として配置される。
- 生き物の生息地、空間のまとまりも持ち込まれる。景観を形作る生物を配置する。
  嵯峨御流の七景（水盤に景観を生ける）、大沢池（大覚寺）、無燐庵

○造られた自然

- 京には、人々に美しさや癒しをもたらす、自然が持ち込まれた。
- 人々は、自然の色彩や季節感を好む。自然以上に誇張された自然を造った。
- 京の造られた自然は、シンボルとなる個々の種と、自然景観を模した生物の生息場所(Habitat)からできている。
- ただし、これらは時間とともに変化する。

〇ここで、自己紹介

専門は動物生態学、両生類学。
研究テーマは両生類、魚類など水生生物の生態およびヒトー水ー生きものの関係について
現在は、生態学的研究の他、おもに学校教育における環境学習の授業やカリキュラムつくりなどに従事。

水生生物、特にサンショウウオが対象
村松さん「似てますね」
神松さん「自分が似てきたのだと思います」

〇時間とともに変わるもの　ー生まれてくる自然ー

生物が変わる　―　人間に想定されていなかった種の侵入や自然の遷移
「生まれてくる自然」

オオタカ：準絶滅危惧種。京都御所にいる。東山からひと飛びで来る。
大きな猛禽類は羽が折れやすい。
広いところで狩をする。精華大裏のゴルフ場。

オオタカのエコロジー（衣食住を保証する、環境との関わり）：
隠れ家（大きな木）や、狩り場（芝生）があり、餌（ドバト）が豊富で、
住み家（東山）からのアクセスが良い。

他にも、ハヤブサがニューヨークで増えている、など。

京都御所にやってくるオオタカ

人々の意識が変わる　―　時代的な価値観の変容などによって、コンセプトが変わる。

南禅寺の庭園（小川治兵衛）：庭園の池は淀ませないために浅く創る。

ニシキゴイ：大正３年の東京博覧会に展示されてからブーム。浅くても飼える。色彩豊か。
→　水を汚す（富栄養化・汚濁）。琵琶湖疏水からウイルス感染。
→　現在は一部でニシキゴイを飼うのをやめる。

我々も、自然に介入する。いつもゼロからではなく、プロセスのなかにも。

〇エコな空間創出について　ー大覚寺のソウギョバスターズプロジェクトを事例に

大沢池をめぐる人と自然のいたちごっこ

名月を眺める貴族の憩いの場
→　水草を刈らなければいけないが、大仕事
→　中国からソウギョを輸入
→　水草が無くなる、池は富栄養化して濁る、ソウギョは餌（水草）が無くなり桜や楓の根を食べる
→　京都嵯峨芸術大学真板教授のグループにより復元
（ソウギョの駆逐、水草を植え人力で刈り取る、池周辺の植生の回復）

京都嵯峨芸術大学特別公開講座
ポスター（2010 年）

〇まとめ

エコロジー空間とは？

　生活の有り様と、それに関わる環境。

　最低限の衣食住、繁殖を考えたときに、よりよい環境創造を創造する。

　エコロジーに対して、これまでの講義で皆から出たキーワード（下図参照）は、いい言葉が並ぶ。

誰のためのエコロジーか？

　結局は、人間本位の快適さを求める。人間の考えるエコロジーは、人間のため。

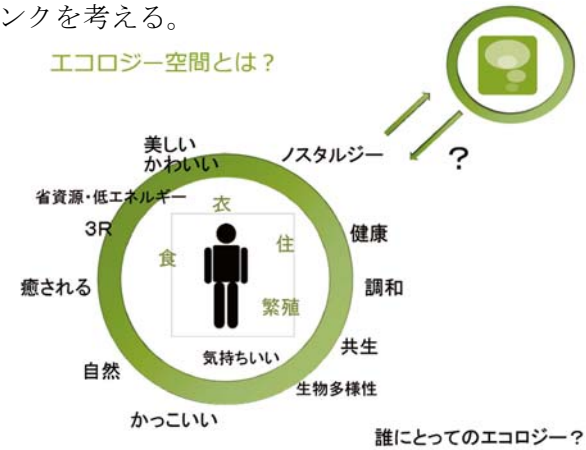
　では、木が人間と共にいるときに気持ちがいいと思う環境とは何か？街路樹は幸せか？

　我々は、自分勝手に「自然と共生している」ということを思う。

自然を演出、装飾品としている、京都の私たちは、自然と共生しているといえるのか？

　私たちが呼びもしないのにやってくる生物は、人間と共生しているかもしれない。鳥、ネコ、ねずみ。

私たちのエコロジー、他の生物のエコロジー、それらのリンクを考える。



（発表スライドより）

［　質疑・ディスカッション　］

〇寝てる人にまず質問（寝てしまう理由がある）、
**　それから、個人の質問**

村松：

　一見建築とかけ離れている、神松さんのエコロジーの話と、どう関わったらいいと思いましたか？

学生：

　滋賀県に住んでいる。琵琶湖が汚い水を京都に送っていると思うと悪いなと思いました。

村松：

　人間は自己中心的、という神松さんの意見については？

学生：

　人間も、自分のことは大切ですが、その他の生物のことも考えなければいけないと思いました。

村松：

　こんなことは、建築に役にたたない、と思いましたか？

学生：

　全く建築と関係ないとは思いません。京都の四季は、京都に多い神社や寺に関わっています。

村松：

　京都には造られた自然が多いということについては？

学生：

　造られた自然でいい。その方が美しいと思います。

村松：

　そうすると、別の生物にとっては迷惑もあるということが、神松さんのお話でしたが。

学生：

　人間が経済活動をしていれば、そこに生まれてくる自然も、淘汰される自然もある。しかし、だからといって経済活動を止める方向へ力が動くのかと、こういう話を聞いていると感じてしまいます。

神松：

いくつか誤解があるようですが、まず、他の生き物を大切にしようということがメッセージではありません。オオタカの例を出したのは、人間にとっていい自然というイメージは、人間のなかにある。しかし、他の生き物にとっていい自然は、他の生き物のなかにある。では、人間が自然と調和したまちをつくるというときに、どういうところからその発想が生まれてくるのだろうという疑問がわいてきます。人間の暮らしのなかに生まれてくる自然は、多少やっかい扱いされるけれど、それを少し受け入れてはどうでしょうか。三条から五条まで歩くと、大量のスズメやムクドリが街路樹に鈴なりに生っている（群れている）。四条あたりはシラサギ。人間が暮らしていると、想定しない自然が入ってくることがあります。

学生：

庭園を見たときに、淀んだ池は実は、植物プランクトンが増えて生態系にはよくないという視点が、面白いなと思いました。アメリカに留学して環境デザインの授業を取り、自然素材やサステイナブルデザインなどを学んだことがあります。その時には、自然と共生や庭園などの考え方は出てきませんでした。日本が独特だと思うのは、庭園などに関して、和のアプローチがあること。旅行で砂漠にいった時も、自分たちは自然豊かなところに住んでいると感じました。その暮らしのなかには、自然を装飾品とみない考え方もあるのではないか。そういう建築デザインができないかと考えています。

村松：

神松さんは、それさえも装飾品であるというご意見でしたが。ニシキゴイも、大沢池も、竹林も。

学生：

お茶をしていて、先生が茶花のためにお墓をつくったことがありました。茶花は、生き物であるし、対等である。京都には少しずつそのような場面があり、そのような人がいて、増えていくといいと思います。

茶花にお墓をつくる心は、自然を装飾品と見なしていないのでは？

神松：

確かに、四季のうつろい、花鳥風月、自然の要素を生活に取り入れていく・・・和のテイストには、生き物を大切にする自然観が入っていると思います。それを敢えて、今日の講義のような話をしたのは、もう１回疑ってみてもいいんじゃないか、と思うからです。頭の中で、文化的であったり、宗教的であったりする自然観を、そのまま自然に投影しているのではないでしょうか。茶花に関して、お墓は、人間の文化的な行為です。桜は春を告げる自然の生き物ですか？昔は、田植えが始まることを告げるものとして利用されました。今では、入学式や入社式。このことはひょっとしたら、人間の暦が先にあって、人間がそれに合う自然のものを探しているのかもしれない。

学生：

コイは見るのには美しいけど、水を汚す。鷹は人間に住む世界を合わせてきた感じがある。無理に人間がエコロジーや自然との共生を打ち出さなくてもいいのではないでしょうか？

村松：

あなたが建築家で、施主がコイを飼いたいといったらどうしますか？

学生：

まめに掃除して飼ってもらうと思います・・・。

学生：

今日の話のなかで、個人的に気になった点は、自然について人間がどういうふうに関わっていくのかということです。自然保護などが一般的にエコロジーだといわれている風潮がありますが、じゃあ本当の自然というのは何かということが、分からなくなってきました。庭園だけでなく、山にも人の手

自然に対する人間の関与はどこで線引きされるものか？

が入っている。どこまでが手付かずの自然で、どこまでがそうでないのか。自然に対する人間の関与という線引きが、分からなくなりました。

村松：

私も共感します。全て造られた自然といえるかもしれない。どこまでが造られた自然か、どうしたら本当の共存になるのか。

神松：

私の考えでは、造られたものは、時間を止めて維持しようとするもの。変わっていくものが、自然。例えば、庭を造ることは、四季は変化しても、同じ形を毎年維持させようとしている。その状態を、私は造られていると思います。荒れていくのは、自然。その変化をどれくらい許容できるかということが、私たちの共生のテーマになるのではないでしょうか。もの作りに対しても、だんだん変わっていくものをつくれないのかと考えます。

村松：

Nature と、自然に変わっていくということは、日本語では同じ。今の話では、Nature が自然に変わっていくものということですね。

神松：

Nature の日本語、自然は、「じねん」が語源で、後者の意味も入っています。

○林

今日のお話は、人間が排除された中での生物はない、というメッセージにもつながるかと思いますが、アメリカでは、人の手が入っていないものを野生の自然という価値観があります。だから、アメリカの世界自然遺産は、人知を超えた、ありのままの自然が選定されている。しかし近年は、里山のように人の手が入っている自然が、人の手が入っているからこその良さをもっているとする価値観が、日本を中心に広まりつつあります。そこで、人の手が入っているからいいというからには、その良さのアピールを考えないといけない。先ほどの墓の話を聞いて思ったことは、建築家は施主に施しをされて、施主のためになにかを造る。自然のために何かを造る作庭師も、建築家と一緒ではないでしょうか。犬小屋を設計するときにも、一生懸命犬のことを考える。施主は犬。長期間、ある進化に関わるような責任は、建築家には取れませんが、施主や誰かのために何かを造るということは、クリエイティブで、神松さんの話とつながるのではないかなと思いました。

村松：

いくつかのキーワードが出てきたと思います。まず、手入れ、人の手が入るということ。それから、誰かのために、何かを造るということ。最後の図に示されたような、私たちのエコロジーを維持することは、地球全体のことを考えないと勝手にできなくなってきている。巨大な勝手です。

○田口

生物を生息地ごと取り入れてしまう人間、セットを都市に組み込むという思想は、都市の機能や利便性、娯楽性などを組み込んだ、都市自体のつくられかたにも通じるように思いました。セットの良さもあれば問題もある。そして、私たちには第三者のエコロジーを考えるという機会が、林さんの施主のお話を除いて、あまりありません。第三者の気持ちを考えていたとしても、主体的に代弁することしかできない。しかし、神松さんがサンショウウオのエコロジーを考えるように、私たちが第三者のエコロジーを考えるとき、アイディアのヒントとなるようなものはありますか？

神松：

私たち（生態学者）は、他の生物のことをわからないなかで、生態学をやります。しかし、完全に第三者のこと（生物のこと）をわかるということはありませんが、少しはわかるということはある。あ

る思考実験として、自分を離れてみて、第三者のエコロジーを考えるということが、結果的に自分のエコロジーを考えることになるんじゃないかなと思います。

〇村松

最後に、神松さんはフィールドワークに参加されるとのことで、何を見るのか。そして、大震災に対して、考えること。その二点を簡潔にお話しください。

神松：

フィールドワークに対しては、目線を同じにして、一緒に歩くことが楽しみです。震災に対して、ものづくりはゴールを考えますが、私たちが考えているのはプロセス。危ないところから逃げる、などは、凌ぎでしかないが、そちらの方法に関心があります。認識科学か設計科学かで言えば、認識科学への関心があるなと、つくづく思います。

次回：２０１１年5月１２日（木）１４：４０～１６：１０
京都精華大学春秋館１０１号室
第４回　塚本由晴（東京工業大学、建築家）　「建築のビヘイビオロロジー」

編者感想

第3回は、初回にブレストし、第2回に拡げられた、私たちのエコロジーに対する考え、エコロジーに対してアクションできることの考えを、神松さんが生態学の視点から切る！という刺激的な回になりました。本当の自然って何だ？と混乱する学生さんにも共感しつつ、もう少し、何かと何かが共に生きる、共に居る、そこに人の手が入るということを、丁寧に考えてみてもいいかなと感じました。村松さんが地球研で考えられている、巨大な人間の勝手。そこまでは難しくても、建築スケールで、あるいは、フィールドワークの目線から、私たちの課題が出てきそうです。

文責：田口純子（東京大学生産技術研究所村松研究室）